

---

ongola famiglia&Il ladro che e' destiatolo

沙伊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Vongola famiglia & Il ladro che  
e' destiatolo

### 【Nコード】

N7364P

### 【作者名】

沙伊

### 【あらすじ】

世界的な大泥棒ルパン三世が狙うのはなんとボンゴレリング！？予告状を受け取ったツナ達はその対策に取り組むが……更に裏で謎の組織がルパン一味とボンゴレを潰すために暗躍し始め……。ボンゴレファミリーVSルパン三世、一体どうなる！？

## 三人の泥棒と三人のマフィア（前書き）

作者初のコラボ作品です。

多少変なところがあるかもしれませんが、ご容赦ください。

### 三人の泥棒と三人のマフィア

とある国のとある場所。そこに、大泥棒と呼ばれる人物のアジトがあった。

見た目はただの丸太小屋。大自然の中で、それは見事に風景に溶け込んでいる。

その小屋の中には大泥棒本人と、仲間である日本人二人。そして大泥棒こと――ルパン三世は、いきなりとんでもないことを言い出した。

「次の狙いはボンゴレリングだ」

この一言により、彼の相棒である次元は飲もうとしていたコーヒーを吹き出してしまった。

顎髭に付いたコーヒーを払いつつ、「何だって？」と訊き返す。ルパンは両手を広げた。

「だから、今度はボンゴレリング盗もうぜって提案してんの。耳大丈夫か？」

「……俺はおまえの頭を心配したくなるぜ」

次元は帽子で隠れた目でルパンを睨んだ。

「おまえ、ボンゴレリングだぞ？ あれがどういうものか解ってるのか」

「もうちろん解ってるさ。解ってて言ってるの」

「……冗談じゃないぜ、全く」

次元は頭を抱えたくなった。

「おい五エ門、おまえからも何とか言ってやれ」

次元に声をかけられ、部屋の隅で刀を抱え、胡座をかいていた五エ門は珍しく困ったような顔をした。

「……拙者、ボンゴレリングとはどのような代物か知らんのだが」

「へ？ おまえ知らないの？」

そう言ったのはルパンだ。

「しょうがないなあ。説明してやんよ」

ルパンはぴん、と左手の人差し指を立てた。

「ボンゴレリングってのはな、ボンゴレファミリーってマフィアが持つ指環のことだよ。七つあってな、それぞれ天候を表している」

「天候？」

「そ。嵐、雨、雲、雷、晴、霧、そして大空。大空のリングはボスに、そしてそれ以外のリングは守護者と呼ばれるボンゴレ幹部が所持している」

「守護者か……。それほど価値があるものなのか？」

五エ門が尋ねると、ルパンはニヤツと笑った。

「そりゃもう！ なんせボンゴレは伝統、格式、規模、勢力全てに置いて裏社会じゃダントツだぜ。そのマフィアのボスに代々受け継がれているんだ。価値が無かったら詐欺だぜ」

ルパンの言い方は多少大げさだが……ボンゴレが裏社会に置いて他のマフィアと一線を画していることは間違い無い。

（だが……今回もいつもみたいにいくかどうか）

次元は残ったコーヒーを飲み干しながら思う。

噂では、ボンゴレリングを持つ次期ボンゴレ十代目——まだ十八の餓鬼だそうだが——及び、その守護者は、かなりの実力者だそうだが。

「おい、ルパン。リングを盗む算段はついてるんだろうな」

次元がそう問えば、五エ門相手にまだ熱弁していたルパンは振り返ってニヤリとした。

「もうちろん。相手が大本ボンゴレだとしても、頭のよさは俺が上だ」

「頭つつうか、ずる賢さだろ」  
次元はそう返し、取り出したタバコに火をつけた。

外に設置されたベンチで、ツナ——沢田綱吉はため息をついた。  
別に何かを憂いたわけでも、誰かに対してあきれたわけでも無い。  
単なる疲れたため息だ。

そのため息を青く澄んだイタリアの青空に吐き出し、ツナは呟く。  
「日本の学校でも大変なのに、イタリアの大学だと付いていくのが  
やっただよ」

ツナ及び守護者達はイタリアの大学に進級していた。  
理由はイタリアの生活に慣れるため、そしてボンゴレ十代目とし  
ての業務をこなすためだった。

辺りを見渡せば、当然誰一人として日本人の大学生はいない。皆  
イタリア人の、同世代とは思えないような人々ばかりだ。

そんな中で、自分達はかなり異質と言える。もともと、イタリア  
人の祖先を持つツナは、元々日本人にしては髪や瞳の色素が薄いの  
だけだ。

「隼人や武は、まだ講義終わらないのかなあ」

ツナは携帯画面を見て呟く。

中学を卒業し、高校を経て、いつしかツナは山本と獄寺のことを  
ファーストネームで呼ぶようになった。

リボーンに、側近を苗字で呼ぶのはおかしいと指摘されたのも、  
理由の一つかもしれない。

ただ、この大学の二年として通う了平や雲雀は、相変わらず「お  
兄さん」と「雲雀さん」だった。

「ううん……隼人はともかく、武は俺と同じように必修科目少ない  
はずなんだけどな……」

ここでの待ち合わせは、確か二時だったはずだ。

食事をしているにしても、さすがに二時半を過ぎるだろうか。

山本は約束は守る人間だし、獄寺は言わずもかな、だ。

さすがに気になり、ツナが腰を浮かすと、目的の人物が走ってくるのが見えた。

「すみません、十代目！」

「悪い、ツナ。遅れた！」

獄寺と山本だ。腕に教材を抱え、走り寄ってくる。

「二人共、遅かったね。何かあったの？」

ツナは今度こそ立ち上がって、二人を見上げた。

見上げた、と言っても、昔ほど背に差違があるわけではない。

獄寺は十センチ、山本に至っては二十センチも違った背の差は、ほとんど埋まっている。

別に二人の成長が止まったわけではなく、ツナがここ数年で随分伸びたのだ。

「あった、というか、はい」

獄寺は言葉を濁し、ツナに一枚の便箋を差し出した。

取り立てて特徴の無い便箋だ。上げるとすれば、封が開けられている点だけだろう。

差出人も、何も書いてない。

それが逆に……怪しい。

「何、これ……」

ツナは慎重に便箋を受け取った。

何かが仕込まれているわけではない。これ自体は危険ではなさそうだ。

「俺宛？」

聞くと、獄寺と山本は頷いた。

二人共、微妙な顔をしている。何が何やら解らない、というような顔だ。

ツナは便せんから手紙を取り出した。シンプルなデザインだ。周りに金のラインが一本入れられている。

(日本語……日本人、じゃないよな)

ツナはつ、と目で文字を負った。

『親愛なるボンゴレ？世、および守護者殿。

二週間後の金曜、貴方方がお守りしているボンゴレの秘宝、ボンゴレリングをいただきに参上いたします。

ルパン三世より』

「……はい？」

ツナは間の抜けた声を出した。

「ちょっ、待って。これ、渡したの誰？」

「赤いスーツを着た猿顔の男です。帽子を目深に被った男と一緒にした」

獄寺の言葉に、ツナは額を押さえた。

「あ、あのさ。その人これ書いた本人だと思う」

沈黙。

『マジですか(かよ)！！』

獄寺と山本は飛び上がりそうな顔をした。

その後、獄寺は顔を歪める。

「あの野郎……頼まれたつつたじゃねーか」

どうやらだまされたいらしい。山本も苦笑している。

そんな派手なスーツを着ている一般人がそうそういるとは思えないが。ツナは無言になる。

「……俺、ルパン三世の顔写真見たことあるから間違いないと思うよ。特徴一致するし」

とりあえず確信を持って言うと、獄寺は余計顔をしかめた。



「知っていたら引っ捕らえて十代目の前に引きずり出したんですが」  
「……お願いだから校内では暴れないでね」

ツナは不安の色を浮かべた。

言っても無駄なのは経験上解っているが、一応。

「へえ」。俺怪盗ナマで見たの初めてだぜ！」

武、そういう問題じゃないよ!?

ツナは思わずそう言いそうになった。

「……はああ。ともあれ、どうしようか。これが本当なら、その対策もしないと」

「そうですね。真偽は調べますか？」

獄寺の言葉に、ツナは「いや」と首を振った。

「多分本物だよ。全く……問題ってまとめて来るよな」

「本当にな。十代目としての仕事もあるし」

「ホントホント……って、リボーン！」

ツナは肩への負荷に飛び上がった。

右へ首を向ければ、肩にスーツを見事に着こなした赤ん坊が。

「またやべー奴に目を付けられたな」

「……いきなり現れたことにはツツコまない。でも、どうして来たの？」

ツナは一瞬声をつまらせたが、すぐ冷静さを取り戻した。長年彼——リボーンと共にいた賜物である。

リボーンはツナの肩に乗ったまま、薄く浮かべていた笑みを消した。

「例の奴らの情報が手に入ったぞ」

『……!!』

三人の表情が変わった。

「……本当？」

「ああ。だが、まだ表面的なことだ。動くのはまだ早い」  
リボーンは帽子をくいと上げた。

「それよりまずそっちの怪盗だ。いつ来るか解ってる以上、対策は練りやすい」

「うん……」

ツナは頷いた後、一瞬考え込んだ。そしてすぐ、顔を上げる。

「……ねえリボーン」

「おめーの考えてることは解るぞ」

リボーンはにやりと、お得意の笑みを浮かべた。

一方、話が見えていない獄寺と山本は顔を見合わせる。

「うまくいけば、こちらの思い通りにいくかもしれねえ。が、その前に、用意しなきゃなんねえもんがある」

リボーンはツナの指にはまった指環を見つめた。

鎖で繋がった、二つの環の指環を。

「とりあえずルパン三世とかいう泥棒を、だますとするか」

最強のヒットマンは、若きマフィアのボスの肩で笑みを深めた。

世界最大のマフィアの？世と、世界的大泥棒の三世の戦いが、今  
始まるうとしていた……

### 三人の泥棒と三人のマフィア（後書き）

こんにちは、沙伊です。

随分前に活動報告で書いたリボンとルパン三世のコラボ作品を投稿することができました。

題名はイタリア語で「ボンゴレファミリーと運命の怪盗」です。

政咲さんという方に考えていただいたタイトルです。

政咲さん、ありがとうございます！（ここで叫ぶな

おそらくおかしなところが多くあるだろうし、更新も遅いかもしれませんが、頑張って書いていきますので応援よろしくお願いします！

## 情報収集

イタリアのある都市。

ルパン三世達は――そこにいた。

時系列で言えば、ボンゴレに予告状が送られる前日のことである。

「さあてと。さっそく手に入れた情報確認といきますか」

仮住いとして見付けたマンションの一室で、ルパンはパソコンを立ち上げた。

「ここに来る前に手に入れたボンゴレの詳しい情報だが……これ、正確なのか？」

次元は懐疑的な表情で尋ねた。

「大ボンゴレの情報だぞ？　そうやすやすと手に入らねーんじゃ……」

「大ボンゴレだからさ。知名度が高いから情報は意外に漏れちゃうもんさ」

ルパンはにやりと笑ってキーボードを叩いた。

出てくるのはボンゴレ本部の詳しい地図、戦闘員、幹部の情報だ。どれもこれも写真付きである。

「これほど詳しい情報をどこで？」

「知らねー方がいいんじゃないの？」

五エ門の言葉に、ルパンはいやらしく笑った。

「ま、それはさておき。そろそろだぜ。お目当てのお宝の持ち主」  
♪

カチ、とマウスが音を立てると、一人の男が映り出された。

若い男である。まだ青年と言っていていい、むしろ少年と言いたくな

るような風貌だ。栗色の髪と瞳で、顔立ちは柔和だった。

「こいつがボンゴレ十代目ボス、沢田 綱吉だ」

「十八……若いな」

五エ門が呟いた。

「何だあ？ かなりの手練れだと聞いてた割にゃあ随分弱々しそうな餓鬼だな」

次元は少しつまらなそうに言った。

「まあその方が俺らとしちゃやりやすい。えっと、沢田 綱吉、現在イタリアの大学に在学中か」

ルパンは目で文字を追っていた。

「初代ボンゴレボス、ジョットの直系で、父はN.O. 2か。こりゃ親祖先の七光りだな」

ルパンはふふん、と鼻で笑った。

「おまえだって祖父の七光りちよつとはあるだろ」

「なあに言っちゃってくれてんの、次元よお。俺のは純粹に実力だぜ」

「ともあれ、この情報は無視してよいと」

五エ門がしめくくった。

「ま、そうだな。となると、警戒すべきはこいつの守護者か」

ルパンは画面を変えた。

「ふむ、次は嵐の守護者か。獄寺 隼人……スモークンボムか」  
悪童が守護者ねえ、とルパンは面白げだ。

映っているのは、灰銀の髪をした青年だ。顔立ちは整っているが、緑の瞳の眼光が嫌に鋭い。

「ボンゴレに入ったのは知っていたが、まさか守護者まで登り詰めていたとはな」

次元は意外そうな顔をした。

「集団に向いてるような奴じゃなかったはずだが」

「知ってるのか？」

五エ門の質問に、次元は「会ったことは無いがな」と言った。

「スモークンボムの噂は色々聞いてるからな。その時の印象だから、多少変わってたり違ったりするのは、まあ当たり前か」

次元は説明のところにある「右腕」という文字を見つめて肩をすくめた。

「ダイナマイトか……あれの対策も考えないとな」

「まあそれは後だ。んでお次は雨の守護者だ」

ルパンが次に見せたのは、短い黒髪の青年だった。

茶色の瞳に整った顔立ち、表情はマフィアラシからぬ、のんきそうな顔立ちだ。

「山本武ね。んーと、時雨蒼燕流？ んだ、それ」

ルパンの声に真っ先に反応したのは、五エ門だった。顔をしかめたあと、「まさか」と呟く。

「知ってんのか？」

次元が尋ねると、五エ門は顎を引いた。

「戦国より伝わる剣術だ……九代目継承者か……なるほど。ふふ、時雨蒼燕流の継承者がいるとは、ボンゴレ侮りがたし」

「そんなに凄いのかね」

ルパンはあきれ顔をしながら画面を変えた。

次に映ったのも黒髪の青年である。

山本武より少し髪が長いが――目の鋭さが半端じゃなかった。

切れ長の瞳は、写真でも消えない刃物のような力を宿しているのだ。

「……こいつは？」

「ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥だよ。守護者最強の男だってさ」

「へえ……トンファー使いか。できれば出会いたくねえ相手だな」

次元は顎髭を撫でた。

いるのだ。関わってはいけない、そういう人間が。

彼はまさに、そういう人物なのだと直感で解った。

「すごいな、この若さで一財団を束ねてやがる。学生時で町一つ支配下になって……餓鬼のすることじゃねえな」

ルパンは顔をしかめた。

「スモークンボムに時雨蒼燕流に最強。とんでもない奴らが守護者になってんねえ」

だが、ルパンはまだ余裕を失わない。

「だがどれだけ実力があるうと俺達は出し抜いてみせるぜ」

パソコンの画面が変わった。

今度は髪を短く――山本より短く切った男が映し出された。額に傷跡があり、鼻に絆創膏を貼っている。

「晴れの守護者、笹川了平。ボクサー？ 特に特徴無えなあ。トロフィーはかなり手に入れてるようだが……」

こいつはパス、とルパンはさっさと流してしまった。

次に映し出された人物の写真に目を向ける。そしてすっとんきょうな声を上げた。

「あれ？ こいつ餓鬼じゃねえの？」

今まで守護者の面々を餓鬼だ何だと言ってきたが、今回は正真正銘――餓鬼。

映ったのは黒いくせのある髪少年である。

緑の瞳はたれ気味で、顔立ちは前の守護者達と比べ物にならないぐらい幼い。

「雷の守護者、ランボ？ 何だよこいつ、幾つだ？」

「九歳、と書かれておるな」

ルパンの言葉に、五エ門が答える。

「わけが解らねえ。何で十になってもいねえ餓鬼が大ボンゴレの守護者になつてんだ？」

次元は帽子の下の眉をひそめた。

「いや、他の奴らにも言えることか。よくよく考えりゃ、こいつらがリングを手に入れたのは十四の時らしいし、歳は関係無えのかもしれない」

つまり実力主義、というわけか。

よくよく考えれば、この年で選ばれるのにはちゃんとした理由が

あるはずなのだ。

理由も無しに年若い人間を守護者に据えるはずない。嵐、雨、雲の守護者がいい例だ。

親祖先の七光りだと思ったがボンゴレ？世、実は侮れないかもしれないなかった。

「……ともあれ、次は霧の守護者だ。ルパン、データを出してくれ」

「いや、それがよお」

ルパンは苦笑いを浮かべた。

「悪い。霧だけデータがちっとも無いんだわ」

「は？」

「やゝ、何でか名前も性別も国籍も出ないんだわ、これが。いくら探してもね。？世とは日本で知り合ったらしいって不確かな情報があるだけで」

ようするに何も解らないということか。

次元と五エ門は顔を見合わせた。

「……何故霧のみ解らないのだ？」

とりあえず五エ門が先に口を開いた。

「んゝ、さあ？ 調べて見るとよ、なゝんでか代々の霧の守護者はあんま表に出ねえみたいよ」

それゆえの情報ゼロかね、とルパンは肩をすくめた。

「でも……それが顕著なのは初代と十代目だ。他のファミリーは名前ぐらいなら出てんのに、この二つはさゝぱり」

「初代の方はしょうがねえんじゃないかねえか？ 何せ百年近く前なんだからよ」

「いや、それでも名前ぐらいは出たぜ。偽名を使ってる奴はいたが……」

ルパンはふと思案顔になった。

「……他の奴らについてゃこんだけ情報手に入れられたのにな。霧の守護者関連で信憑性が高い噂があるだけだ」

「噂？」



「ああ」

ルパンはシリアスな顔を崩さないまま言った。

「霧の守護者は、復讐者<sup>ヴィンディチェ</sup>に捕まってるってな」

「……!!」

次元と五エ門は驚愕した。いや、驚愕しないはずなかった。

裏社会に生きる彼らにとって、その名は全身を震わせても足りないぐらいの恐怖と嫌悪を抱かせるものだからだ。

「復讐者……! マフィア界の掟の番人に捕まってるって……何したんだよ、そいつ」

「さ……? だが、一人いないだけでもこっちとしちゃありがたい。その噂が本当だと願いたいね」

ルパンはパソコンを閉じた。

「さて。情報は頭に入れたし、必要なもん買いそろえるか」  
ルパンは頭の中で作戦を練りながら立ち上がった。

――

予告状を受けて三日後――

ツナは手の中の指環を見つめた。

電気もつけずに暗いままの室内で、指環は鈍く光っている。

思い出深い形の指環だ。苦く辛い思いを思い起こさせる形の指環だ。

目を閉じれば、四年も前だというのに思い出される。

おぞましい全力を出した一人の白い男、リングを与えてくれた遠い祖先、戦いの中で多くの人々を救うために消えた二つの命……

「……」

あの時と同じ形、同じ輝き。  
違うのは。

「……あの後、あんなことが起こるなんて思わなかったなあ」

あの未来での戦いの後、あんなに辛く、あんなに哀しく、あんなにむごい戦いがあるなんて、思わなかった。

傷付け傷付けられ、その先にあったのは……

「……はあ」

ツナはため息をついて指環にチェーンを通した。それを首にかけ、服の中に押し込む。

「……寝よう」

明日、会議をしなくちゃいけないし。

そう呟いて、ボンゴレ？世はその部屋を後にした。

己の計略がうまくいくよう祈りながら。

## 情報収集（後書き）

第二話でした。

前回ルパンサイドが短かったのでルパンサイドメインにしました。  
次回はボンゴレサイドメイン、そしてルパンの天敵の登場予定です。

では次回！

## 偶然は必然とも言える

ルパンはイタリアの町中を歩いていた。

ゆったりと、ゆっくりと。

いつものように派手なスーツを着て、だ。

しかし不思議とその姿は風景に溶け込んでおり、誰も視認することはできない。

怪盗として、気配を消すことは造作も無いことだ。むしろ一般教養だと言っている。

自己顕示欲が強いので、よく必要以上に己をアピールするのだけだ。

（さうて、作戦もばっちりだし、必要なもんは手に入れたし、後は予定日までのんびり——）

余裕を持って歩いていたルパン。その足が、ぴたっと止まる。

「……うん、うん。そうか……じゃ、ここでしばらく待ってるよ。

三時ね。それじゃ」

そう言って通話を切った青年は、ふ、と息をついた。

柔和な顔立ち、栗色の髪、優しげな瞳。

そして細い指に似合わない、ごつく、だが美しく輝く指環が——

（おいおい、信じちゃいないが神さん仏さんよお）

ルパンの頬に冷や汗が伝った。

（偶然にしちゃあたちが悪いぜ。何で、何で……）

ボンゴレ？世がここにいる！？

ポケットは手に突っ込んだまま。

足は立ち止まったまま。

直立した状態で？世を見つめる。

なぜだか動けない。その場から足が離れない。

不測の事態に珍しく頭が付いていかないらしい。

それでもようやく身体が動くようになったのに気付いて踵を返そうとして――

「……あれ？」

ちよつとばかり、遅かったらしい。

「顔色悪いですけど、どうかしたんですか？ えと……ルパン三世さん」

向こうから話しかけられてしまった。

――

奇妙なことになった、とルパンは思った。

何で自分は、ボンゴレ？世と並んでコーヒーを飲んでるんだろう。

「体調は大丈夫ですか？」

「おう……」

心配そうに顔を覗き込んでくるボンゴレ？世こと沢田綱吉に、ルパンは短くそう返すしか無い。

こいつは自分が敵と解っているのに、何でこうも親しげに話しかけられるのだ。

不敵なのかお人好しなのか、ともかくマフィアのボスには不適格な行動である。

そんなふうに使われているなんて知らないだろうボンゴレは、コーヒーの入った紙コップを両手で包んだ。

「よかった……青い顔で固まってたからどうしたのかと思いましたよ」

おまえのせいだ、おまえの。

そうは言えず、ルパンは黙り込む。

ただ、ボンゴレの指にはまった指環にちろつと視線を向けた。

ボンゴレの刻印と名が刻まれた銀の指環だ。おそらくこれがボンゴレリングだろう。

すぐ目の前に目的の物がある。

しかしそれを今奪おうとは、ルパンは思わなかった。

この場所が人通りの多いところだというのもあるが、予告状を出した以上、その通りに動きたい。それが祖父より受け継いだ怪盗としての矜持だ。

まあ喉から手が出るほど欲しいんだけど。

「……あのさあ」

ルパンは頭をかきながらリングから目を離した。

「何で俺がルパンで解ってて声かけるわけ？ コーヒーまでおごってさ」

「あ……えっと」

ボンゴレは困り顔で笑った。

「そうですね……今はリングを盗られる心配が無いから、かな？」

「はあ？」

「予告状を出した以上、きっとその通りにすると思ったんで、今声かけても大丈夫かなー、て」

お気楽ですよ、とボンゴレは笑いながらコーヒーをすすった。

しかし、ずばりと内心を当てられたルパンは呆然とする。

やはりただ者ではないのか。この余裕は、そこから来るものなのか。

警戒心をあらわにしていると、向こう側の道に車が停まった。

ただの車ではない。パトカーである。

ルパンは嫌な予感がした。

出てきた人物は。

「銭形警部、ここが通報場所です」

やっぱりとっつあん!!

ルパンは頭を抱えそうになった。

間違い無い。あの帽子とコート、何よりあの顔は見間違えよう無い。

「何でとっつあんがここにいの……」

例によって嗅ぎ付けてきたか。全くよくやるよ。

ルパンは半分感心、半分あきれながら見ていると、銭形と目が合った。

しまったと思った時にはもう遅い。

「ルパン！ 今度こそ貴様を逮捕する!!」

「やっべ」

ルパンはその場から逃げようと身体の向きを返った。

が、ボンゴレに腕を掴まれ、それは叶わなかった。

まさかグルか！ ルパンがそう思っていると、ボンゴレは腕を掴んだまま走り出した。

銭形とは真逆の方へ。

「へ？」

「こっちです！」

啞然とするルパンに対し、ボンゴレは凄い力で引っ張った。

後ろから制止の声が聞こえるが、ボンゴレの足が止まる様子は無い。

慌てて一緒に走るルパンが後ろを振り返った時には、銭形の姿はるか遠くになっていた。

さすがに急に走ったら息が苦しいな……

ツナは胸に手を当てて息を整えた。

「急に走んなよ……」

「す、すみません」

同じく荒い息のルパンに、ツナはどもりながら頭を下げる。

「でもあのままだったら捕まってたじゃないですか」

「なくに言っちゃってんの。俺はそうやすやすと捕まんないよ。例え銭形のとつつあん相手でもな」

「あ……そうですか」

よけいなことしちゃったかな、とツナは少し落ち込む。

するとルパンはばつの悪そうな顔を浮かべた。

「あ……なんだ。とりあえず助かったよ、あんがとさん」

「あっ……はい！」

ツナはパツと顔を上げた。

「あ……随分場所離れちゃったし、隼人に連絡入れなきゃ」

二人がいるのは、最初の場所からかなり離れたところの路地裏である。

警察を撒けた方がいいが、待ち合わせ場所を変えなければならなくなってしまうた。

まあ自業自得なのだが。

「あ……そういえばルパンさんは用事があつてあそこにいたんじゃないや」

「いや、俺は用事終わってるぜ。おまえは早く連絡とやらをしろよ」

「は、はい」

ツナは鞆から携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

トゥルルル、というコール音の後、『十代目?』という声が聞こえてきた。

「隼人。悪いんだけど待ち合わせ場所変えてくれないかな?」



『何かあったんですか』

「色々ね。そうだな、武とかとよく一緒に行くコーヒーショップあるじゃん。あそこの前でどう？」

『解りました。山本にもそう伝えときます』

「お願い。じゃ」

ツナは通話を切って顔を上げた。

「それじゃあ俺、行くんで……気を付けてくださいね。まださっきの刑事さんがいるかもしれないし」

ツナはその場から離れようとした。

と――

「ちよい待ち」

肩に手を置かれた。

「ちよっと聞きたいことがあるんだけどよ」

「はあ……何ですか？」

ルパンに対し、ツナは首を傾げた。

「いやよ。まあこれ言っても問題無いから言うけどよ。霧の守護者の情報が探しても全く無いんだわ」

「……まさか俺に情報提供しろなんて言いませんよね」

「まっさか。ただ理由が知りたいだけよ。何で霧だけ情報零なのか」

「ん」

ツナは困り顔になった。まさかこんなことを訊かれるとは。

この答え次第でボンゴレX世がどういう奴か解る。

ルパンは見定めるようにボンゴレを見つめた。

あえて踏み込んだ質問をしたのは、ボンゴレX世が警戒するに足る男か判断するためだ。

先程の走り方を見れば、自分など相手にならないぐらいの実力者であることは解った。

守護者達の情報を見る辺り、おそらく十代目ファミリーは武闘派なのだろう。

だが今時、武だけで全てを統べることはできない。情報社会の中で重要なのは最終的に知なのだ。

この男にはそれがあるのか――ただのお人好しで愚鈍な男なのか。この質問の解答で警戒レベルを決める。

なぜならリングを盗んだ後の処理もあるからだ。

職業柄、盗んだ物の持ち主に恨まれることが多々ある。その時の処理も含めて、この男の見定めをできる時にしなければ。

「……そうですね。詳しくは言えませんが」

ボンゴレは口を開いた。ここは定石通りだ。問題はここから先である。

「霧は……部下じゃないから」

「は……？」

「すみません……これ以上は言えません」

それじゃ、とボンゴレは今度こそ走り去った。

「……」

ルパンは立ち尽くしたまま考える。

結局あの答えでは判断しきれなかったが、しかし。

最後のあの顔は、何だ。

あの、苦しさと哀しさを押し潰したあの顔は、何なんだ。

一体霧の守護者と何があったというのだろうか。

「……何なんだ」

ルパンは現段階では、そう言うしかなかった。

ツナは小走りながら思った。

どうして情報が無いか。

簡単なことだ。だが教えられない。教えられるわけが無い。

霧の守護者は今、いないなんて。

ツナは目を閉じて息を吐いた。

「ごめんなさい……俺は貴方を利用します」

ツナは苦しさに胸が潰されそうになりながら呟いた。

**偶然は必然とも言える（後書き）**

銭形ちよつとしか出てないという……彼好きなんですけどね。次回  
はもっと活躍させよう。

そろそろ雲雀か了平辺りを出したいです。では！

## 予告当日

時刻は午後五時。ちょっと困った事態になったな、とツナは思った。

「……というわけで、ルパン逮捕は我々にお任せいただきたい」

目の前のソファーに座る銭形警部は、ツナ達にそう言った。正確にはツナの隣に座る九代目にだが。

ボンゴレ邸内である。どうやってここを知ったかは解らないが、なぜか銭形警部が大勢の部下を連れてやってきた。

大勢と言ってもボンゴレ内の戦闘員の四分の一以下の人数である。それに部下のほとんどは外で待機しており、今ここにいる部下は四人だけだ。

そんな彼が何をしに来たと思えば、ルパンを逮捕しに来たというのだった。

いや、彼とルパンの因縁はボンゴレも知っていたので当然といえば当然なんだが、問題はなぜ銭形がそれを知ったのかである。

ボンゴレリングが狙われていることを、外に漏らした覚えは無いんだが……

「それに関しては言えませんか」

ツナがそう質問すると、銭形はそれをきっぱりつっぱねた。この間ルパンといたのはツナだとは気付いてないようで、対応は穏やかなものだ。

「ただ、外部からの情報とだけ教えておきましょう」

「はあ……」

「しかし、まあそれはともかくとして。狙われているという指環を見せてはもらえませんか？」

「あ……はい」

ツナは九代目と視線を交わらせた後、指から指環を引き抜いた。それをゆっくり銭形に差し出す。

「どうぞ」

銭形は慎重にそれを受け取り、じいっと検分した。

「ほう……見事な細工の指環ですな。一体幾らするんです？」

「さあ……。正直値段は付けられないです。価値があまりにも高過ぎますから」

何せ世界創造の礎だし、とツナは内心で付け加えた。

すると銭形は少し青い顔をして互いの間に置かれた長机に指環を置いた。

価値に驚いたようである。

「そんな……凄い物なんですか」

「ええ」

ツナは頷く。中学時代から付けていたため、価値が幾ら高くてもツナはもう驚かないが。

「ふうむ……ルパンが狙うのも、当然ですな」

「はい」

「だからこそ、やはり我々が守らなければ！」

やっぱりそこに行くのか。

ツナはげんなりとなった。

まさかマフィアであるボンゴレのアジトに彼らを置いておくわけにはいかないし、こちらにはこちらの思惑がある。邪魔をされては困るのだが。

「……解りました」

と、急に九代目がそう言った。

「なら貴方がたは外の入口を固めてください。内側は、こちらで警備するので」

「え、しかし……」

「銭形さん」

九代目は優しい光を瞳に灯したまま、きっぱりと言った。

「貴方がたには貴方がたのやり方があるように、わしらにもわしらのやり方がある。内側にあまりよその人間を置くのは避けたい。何、守ることは手慣れています。侵入しそうな場所を警護していればルパンも入ってこれんじやろ」

「……なるほど、確かに」

銭形は納得したように頷いた。

「解りました！ 我々は外を完璧に守りましょう。鼠一匹入れやしません！」

何やらやる気を出した銭形は立ち上がった。

そして後ろに控えていた部下と共に部屋を出ていく。

出る前に、銭形はこちらに頭を下げることは忘れなかった。

ぱたん、と扉が閉じられるのを見た後、ツナはふー、とため息をついた。

「何とかアジト内に駐留されるのを避けられましたね」

「ああ。彼らにいてもらっては困る。ましてや、ルパンは捕まえられてはいけないんじやろ」

九代目も白髪をかいて緊張を緩めた。

「ルパン三世には我々にたどり着いてもらわねばならない……じゃろう？」

「……はい」

ツナは顎を引いて立ち上がった。

「……随分知恵が回るようになったなあ、ツナ君」

九代目が嬉しそうに、だけど哀しそうにツナを見上げた。

「……ボスとして嫌でも知恵が身に付いちゃいました。でも……今のボンゴレをぶっ壊すっていう目標は、まだまだ遠い」

ツナは苦笑しながらも、その瞳は真剣だった。

忙しく十代目ボスとしての仕事をこなしつつも、ツナは忘れてい

ない。

自分がボンゴレを受け継いだ理由。今のボンゴレをぶっ壊し、元に戻すこと。

守るための、ボンゴレにすること。

そのためにはツナがもっとボンゴレ内で信頼を得る必要がある。そうしなければ必要の無い機関などを分解縮小したりすることもできないだろうから。

しかし今回の件は違う。

純粹に、仲間を助けるためのものだ。

そのためにも、ルパンの力が必要なのだ。

「……とりあえず俺……ん？」

ツナはどたばたと走る音に気が付いた。

足音はこの部屋の前で止まり、ばたんと乱暴に扉が開かれる。

「綱吉君！」

「し、正一君」

ツナは急に転がり込んできた友人に目を丸くした。

現れたのは眼鏡の青年——入江正一だ。ボンゴレの技術者としてイタリアの、ツナ達とは別の大学に通っている。

「どうしたの、正一君。そんなに慌てて」

「た、大変なんだ……綱吉君」

正一は胸——じゃない、腹を押さえて顔を上げた。

「さっきジッリョネロから連絡があって……」

「？ うん」

「何者かに襲撃されたって……」

「……ええ！？」

ツナは目を剥いた。

「だ、誰に！」

「れ、例の……」

正一は息を整えた。

「例の奴らだ。例の、クローム髑髏が追ってた……」



皆まで言わせなかった。

ツナはその前に部屋を飛び出していた。

「綱吉君!？」

その後ろを慌てて正一が追いかける。

「綱吉君!　どこいくんだい!？」

正一にそう呼び止められ、ツナはぴたりと足を止めた。

「ハア……まあ気持ちは解らなくもないけど、ね」

正一は頭をかきながらツナの正面に回った。

「……大丈夫かい?　綱吉君」

「……うん。ごめん、取り乱して」

「いいんだよ、別に!　さっきも言ったけど、気持ちは解らなくもないし」

正一は苦笑し、表情を改めた。

「……ようやく表に出始めたね」

「うん」

ツナは顎を引いた。

「ジツリヨネロを襲った理由は、多分トゥリニセツテだろうね」

「うん、スパナも言ってた。マーレリングと大空のおしゃぶり……」

一石二鳥を狙うなら、ジツリヨネロを襲うのも解るしね」

正一はツナの言葉に同意する。

「トゥリニセツテ狙いということは解った。問題は、相変わらず敵の正体がおぼろげだってことだけど……狙ってきた奴は何も言わなかったの?」

ツナは正一に尋ねた。

「……何かを言う前に、齒に仕込んでいた毒で死んだらしい」

「……そう」

ツナと正一はうつむいた。

「やっぱり、ルパンさんの力が必要だな」

「え……例の作戦、マジだったの!？」

正一は目を丸くした。

「うん。それでさ、ここのコンピュータ総管理者の正一君にお願いがあるんだけど」

ツナは申しわけ無さそうな顔で頬をかいた。

「な、何か嫌な予感が……うう、お腹痛い」

それに正一は汗ジツで後ずさるのだが……あいにく彼は危機回避能力を持っていなかった。

――

予告日当日。ルパン達は遠く離れた場所でボンゴレアジトの城を眺めていた。

後ろには、この日のために用意したヘリが停まっている。

「下見に来た時もあったか、ほんつとでけー城だなあ」

ルパンはのんびりとそうこぼした。

「あゝんなどここに住みてーわ。ボンゴレの資産は一体幾らなのよ」

「んなことより、そろそろ行くぞ」

次元が荷物を背負ってたしなめた。その隣で五エ門が腕組みをして立っている。

「おうよ。さあて、ボンゴレリングを盗んじゃおーじゃねーの」

ルパンは不敵に笑い、ざっ、と一步踏み出した。

## 予告当日（後書き）

今回は短いです。というかいつも短いです。

長く書こうと思うんですけど、どうも書けないです。  
次は長く書けるといいなあ。

## 騙し合い侵入戦闘、開始

銭形は九代目の話を鵜呑みにしたわけではないし、かと言って別に彼の話に納得したわけではない。

ただ、譲歩はした。

自分達は外を、完璧に守るつもりでいた。

勿論相手はルパンだ。正攻法など取らないことぐらい、銭形には考えなくとも解ることだ。

問題は、ルパンがどこから侵入してくるかである。

正面の門は当然のこと、裏口やら排水溝やら人間が通れそうな穴から人間が通れなさそうな穴まで、とにかく侵入されそうな経路を全て塞いだ。

そこを守る部下達が倒される可能性もあったが、それに対しても策は立ててある。

第二の問題は、ルパンの立てた作戦だ。

いつも自分を出し抜いてきた彼の奇策妙策は、一体どんなものなのか。

銭形は正面門の前で仁王立ちしながら考え込んでいた。

今度こそルパンを逮捕したい。それに、どうもこの主は妖しいのである。

実は銭形は、彼らがどういうことを生業にしているのか知らなかった。

ただ匿名の電話でこの場所とルパンのことを教えられたのだ。

ここで狙われたのは指環だということも、その匿名人物からの情報だ。

しかし、どうして指環だけを狙うのだろうか。

これだけの城だ。他にも価値のある宝はあるだろう。少し入っただけだったが、調度品も高価そうなものばかりだった。

なのに、なぜあの指環だけ？

価値があるのは確かだろう。持ち主自身が言っていたし、何よりルパンが狙っている。

しかし、ただ一つの指環のためにこの堅牢な城に乗り込むなど……いや、ルパンはそういう男だ。それは銭形がよく知っている。今は持ち主のことはどうでもいい。第一ルパンが狙い、銭形が守ろうとした宝の持ち主の中には、銭形の耳にも入るほどの悪党がいた。

それを考えれば、妖しい程度どうでもいい。

もし何か裏家業をしているのであれば、ルパン逮捕の後で捕まえればいいだけだ。

銭形はそう思いながら目を閉じて、時が来るのを待つ――

「銭形警部！」

部下の声に、銭形は目を開いた。

「来ました！」

「どこだ！？ 裏？ それとも上空か？」

「いえ……正面です」

「正面だと……！？」

銭形は改めて前を確認した。

目の前から二人の男が歩いてくる。

一人は着物に袴姿の、刀を持った長髪の男。

もう一人は赤いジャケットに黒いズボンとシャツの猿顔の男。

「ルパンと……五エ門か！」

銭形は呻いた。

まさか正面から来るとは思ってもみなかった。

しかしこの大人数相手に、たった二人でどうするつもりだ？

「よし、銭形のとつつあん。元気い？」

「なあにが元気い？　だ。たった二人でどうするつもりだ？」

銭形は大勢の部下と一緒に正面門の前を固めた。

「この人数相手に、二人で切り抜けられると思うか？」

「五エ門ならやってくれるぜ。それにしてもとつつあん。変だとは思ってねーの？」

「あん？」

「次元がどこにいるかだよ」

にやりとルパンが笑った瞬間――

ズガアアアンツ

銃声が響き渡った。

「……な？」

一体どこから何を狙ったのか、一瞬銭形には解らなかった。

ただ耳に届いたのはバラバラというヘリコプター独特の音と、キィキィという金属がこすり合う音だった。

「つ……なあ！」

銭形は後ろを振り返り、目を見開いた。

金属でできた高い門。古くさいその鍵は、意外にも電子製の鍵だった。

そこに、銃弾がめり込んでいる。

そして鍵を破壊された門は、半開きになっていた。

そして上空。星が始めた空には、一機のヘリが飛んでいた。

遠くでよく解らないが、少し開いたドアから、長い銃身が僅かに見えている。

「まさか！」

「上から狙わせてもらったぜ、とつつあん」

ルパンはそう言い、サングラスをかけた。隣の五エ門も、同じく。そしてルパンは何かを投げた。小さい、球体の何かを。

それは地面に叩き付けられたとたん、カッと強い光を放った。

「ぐお！ 閃光弾かっ」

銭形達は思わず目をつむる。ヘリの音が遠ざかっていくのが聞こえた。

そして光が収まった時――

ルパンと五エ門の姿はどこにも無かった。

いきなりの消失に驚き、銭形の思考は一時停止する。しかし早々に思い至った。

「奴ら、今の光に合わせて侵入したな！」

銭形が振り返ると、案の定門は先程より大きく開いていた。

「くうっ……おのれルパンめえ！ おい！！」

銭形は一瞬、全員で突撃しようかと思った。

しかしヘリが遠ざかったのを考えると、後から今度は次元が来る可能性も充分ある。

もしかしたら、先程のルパンが次元の変装だったかもしれない。

ルパンも次元ほどでないにしろ、かなりの銃の腕前だ。先程の上空からの狙撃が不可能とは言い難い。

もしここを開けたりしたら……！

「半数は俺と一緒に屋敷内に入るぞ！ もう半分はここを守れ！」

『はい！』

部下達の応答を受け、銭形はボンゴレ邸内に入っていた。

この時銭形は判断を誤ったと言える。

この時、自分達は門の前から動くべきではなかったのだ。

自分達は、邸内に入るべきではなかったのだ。

まさか自分達が邸内に入ることによってルパン達の侵入を許すことになろうとは――思いもしなかったのである。

(ぬふふ♪ だあい成功♪)

警官の一人はほくそ笑んだ。

いや、警官の制服を着た男は、か。

その男は先頭を行く銭形を確認し、自分の両側にいる二人に目配せし――三人で隙を見て物陰に身を隠した。

当然その三人は警官ではない。ルパン、次元、五エ門である。

なぜ彼らが警察の中にいるのか？ それはルパンの立てた作戦を説明せねばならない。

まず、上空に現れたヘリコプター。あれに次元は一度として乗っていない。

あのヘリは無人だったのだ。リモコンで操作して動かすことができる、遠隔操作可能な改造ヘリなのである。

ドアから飛び出ていた銃身は固定されただけの物だ。当然弾丸は放たれていない。

なら射撃は誰が、どこからしたのか。

撃ったのは銭形が読んだ通り次元だ。しかし、別に離れた場所から撃ったわけではない。むしろ近距離から、照準を定めるまでもない近い距離から撃ったのだ。

警察隊の中で、である。

次元はルパンが来る少し前、警察の中に紛れ込んでいたのだ。

そしてルパンが来たのに合わせて、音が出ないように改造した小型拳銃で鍵を破壊したのである。

当然閃光に合わせて門を開けたのも次元だ。

その間、ルパンと五エ門は警官の格好に着替え、警察隊の中に紛れ込んだ。

ルパンが一人ではなく、五エ門も連れてきたのは、警察隊の中に自分達の仲間がいる可能性を銭形に捨てさせるためだ。

それに五エ門に強行突破される可能性を持たせ、注意を次元から



そらせるためである。

そして——まんまとルパンの術中にはまった銭形は、ルパンの思惑通り中に仲間を引き連れて行った。

銭形はルパンを追いかけたつもりだろうが、その行動はルパン達を招き入れることになってしまったのだ。

そして彼の行動は、ボンゴレ内を引っかき回すことになるだろう。

「さあて、行くか」

「この服はどうする？」

進み出ようとしたルパンに、五エ門が尋ねた。

「いや、このままがいい。これなら向こうも油断するだろうからな。ちいっとばっか動きにくいがしゃーねーだろ」

ルパンは肩をすくめ、進み出そうとした——

「おい」

呼び止められた。

ルパンはふと顔を上げ、その顔を見て内心舌打ちする。

少し離れた場所で立つ青年。スーツを着た短い髪、すらりと背の高い彼に、ルパン達は見覚えがある。

ボンゴレファミリー雨の守護者——山本武だ。

「……何ですか？」

ルパンは平静な声でそう返した。

「何で警察がこの中にいるんだ？」

山本の問いかけに、ルパンはトーンを少し上げて答える。

「ルパンが中に侵入したんですよ。それで自分達が搜索に」

「ふうん。変だな」

山本の言葉にルパンは首を傾げる。しかし次の言葉に目を見開くこととなった。

「自分で自分を搜索するなんてさ」

「……!？」

「なあ、ルパン三世さん」

山本はにっと笑った。悪意の無い笑みだ。

「何のことですか？ 自分達は……」

「あんた達が門の前でやったこと、全部見てたぜ。守護者全員な」  
「っ……！」

確信を持った声。彼が言ってることは、真実だ。

「つつても、作戦見抜いたのは俺達じゃねーんだけどな」

山本は頬をかいて笑った。

「うちには凄えかてきょーがいるからよ」

「……わけが解んねーぞ」

ルパンは声の調子を元に戻した。もう偽っていてもしょうがないと判断したのである。

「で？ 俺らをボンゴレX世に差し出す気か？」

「いや……どうかな？」

山本はそう言って、手に持った刀を抜いた。

刃に燕が刻まれた、細身の刀だ。

「ただ少しばかり、試してくれと命令はされたな」

「試す？」

「実力をだ」

山本の瞳が鋭さを増した。

これは、戦うものの目だ。

「下がっている、二人共」

と、五エ門がすつと前に出た。

「こいつの相手は、拙者がする」

その手に、山本と同じく刀を持って、だ。

「おぬし達はボンゴレリングを盗んできてくれ」

警察の制服を脱ぎ、元の着物姿になった五エ門に、ルパンと次元は顔を見合わせた。

「いいのかよ」

「こいつの相手は拙者しかできないだろう。同じ剣士である拙者に

しか、な」

五エ門の言葉を受け、二人は再び顔を見合わせ——そして彼に背を向けた。

「んじゃ、お言葉に甘えて先行くわ。適当にやって追いついてこいよ——」

「解っている」

頷いた五エ門を見て、ルパンと次元は屋敷の方へ走っていった。

「いいのかねえ、ほっというて」

次元は走りながら視線を少しだけ背後に向けた。

「ありゃ絶対、とことんやるつもりだぜ」

「ほっとけほっとけ」

ルパンは苦笑いした。

「どうせ言ったって聞きゃあしねえよ。あの戦闘馬鹿は。俺達にゃあ解らねえ感覚だよ」

「だな」

二人は苦笑を見せ合いながら、屋敷へと入っていった。

「追いかけるのだな」

五エ門の言葉に、山本は「まあな」と答えた。

「ちよっとこっちの事情なんだ。それに、俺あんたと戦ってみたかったし」

「奇遇だな。拙者もおぬしと戦ってみたいと思っていた」

五エ門は刀を構えながら、にやっと笑った。

「時雨蒼燕流の技、見せてもらおう」

「勿論。俺もあんたの剣、見せてもらうぜ」

剣士二人は笑い合い——

刃を交えるために踏み出した。



## 騙し合い侵入戦闘、開始（後書き）

山本VS五エ門な感じで今回は終了。

次回は侵入を果たしたルパンと次元を書きます。  
銭形の動向も入れる予定。では！

## 銃と的と警察と

銭形は進軍を停止していた。

一人の男に立ち塞がれてである。

黒髪の青年だった。前髪の下からはつり上がった形のいい眉と、切れ長の漆黒の瞳が覗いている。

全体的に、造形の整った顔立ちだった。立っているだけでも目を惹くだろう。

いや、それより。

この男、どこかで……

「……あつ」

思い出した。銭形は目を見開く。

この男、確か日本の警察庁長官といた男だ。

一年ほど前だったか、日本にいた時に警察庁での用事を終えて帰ろうとしたところ、彼が長官と一緒にいるところを見たのである。

何かを話していたようだが、どうも長官の方がへこへこしていたのを覚えている。

そんなことを思い出していると、青年は引き締まった唇を動かした。

「銭形幸一警部だね」

「む……」

銭形はフルネームを呼ばれたことに少しだけ眉を動かす。基本的に名字で呼ばれることが多いので、妙に思えたのだ。

「悪いけどこれ以上は進ませないよ。不本意だけど、命令だね」  
青年はそんなことを言った。

たった一人でこの人数に対処できるはずなのに、だ。

「馬鹿なことを言うな。第一ルパンがこの中に入り込んだんだぞ。

我々警察が追いかけるからねば——」

「君達がルパン三世に踊らされていてもかい？」

銭形は青年の言葉に口をつぐんだ。

「君達がこの屋敷内に入ること自体が彼の計略の一つなんだよ。君はまんまとはまってしまったわけだ」

「何……だと……」

銭形は青年の話をすぐには理解できない。しかし数秒もしないうちに、その意味が解った。

「つ……くそお、ルパンの奴……！」

その場で地団駄を踏みたくなったが、そんな時間も惜しい。

「おい、ルパンを探すぞ！ 散らばれ——」

「君は人の話を聞いていなかったのかい？」

青年の不機嫌そうな声が銭形の命令を遮った。

「君達はこれ以上進ませない。多少手荒な真似をしても構わないと許可ももらっているよ」

「許可だと？」

銭形が眉をひそめると、青年は先程までへの字に曲がっていた口元をすうっと緩めた。

それは好意的には程遠い——むしろ獲物を前にした獣のようだった。

「君達を、咬み殺す許可だよ」

そして青年は、銭形達に向けて殺気を振りかざす。

——

何とかボンゴレ邸内に入ることができた。

しかし、気にかかっていることが一つ。

「やけに静かじゃねーの？」

ルパンは眉をひそめた。

広い廊下。二人並んでもなお余裕を残すその廊下には、人の姿も気配も無かった。

こんな日に見回りの人間もいないなんて、明らかにおかしい。

「まーさか俺らのことなめてんじゃねーだろーな」

不快げに呟くルパンに対し、次元も顔をしかめて辺りを見渡す。

見渡すと言っても物陰に隠れているため、視界は限られているが。

二人はすでに、警察の制服を脱いでいた。

山本の言葉はおそらく真実だろうと思い、ならばただ重いだけの制服は邪魔なだけだ。

そしていつもの格好に戻り、廊下の角に身をひそめているのである。

これほど大きな屋敷———というか城、しかも所有しているのはマフィアだ、見回りぐらいいてもいいはずだ。

自分達のような盗人が来るのが解っているなら、なおさらである。

先程の山本武の行動といい、何か妙だ。

「……早く済ましちまうか」

ルパンはそう一人ごちして、一步踏み出した。

「……!?!? ルパン、危ない!」

突然、次元が叫び声を上げた。

ルパンが驚いて立ち止まると、目の前に突如として十数のダイナ

マイトがばらまかれた。

「い、いいい!?!」

慌てて身を引くと、ダイナマイトは次々に爆発する———かと思いきや。

ブシューウウウウツ

辺りが煙に包まれた。

「え、煙幕!?!」

次元は辺りを見渡した。が、当然何も見えない。



と。ぐいっと誰かに襟首を掴まれ、引っ張られた。

「なあっ!？」

次元はそのまま、自分を引っ張る人物と共に窓の外へ飛び降りた。飛び降りたと言っても一階である。怪我どころか衝撃すらも大したことない。

しかし、自分を引っ張った人物を見た次元は、精神的ショックを喰らった。

「あ、赤ん坊……?」

今なお自分の襟首をがっちり掴んでいるのは、スーツを着た小さな――小さ過ぎる体躯の少年。

つまりは赤ん坊だった。

その赤ん坊は帽子をぐいっと上げ、同じくぐいっと唇の端を持ち上げた。

そして手を離れたかと思うと、口を開く。

赤ん坊のくせに、喋る。

「おめーが次元大介だな。ちょっと俺と勝負しねーか？」

勝負とは一体何なのか。それを聞いたかったがまずはルパンの安否を確認したかった。

上体を起こして屋敷内を見れば、窓から険しい顔を出すルパンの姿が。

「ルパン、おまえ先に行け！」

次元が大声でそう言うと、ルパンは一瞬ためらいを見せた後、だっと走り出した。

目指すはボンゴレX世、だ。

そして次元は立ち上がり、おそらく追いかけるであろうこの謎の赤ん坊に銃を向けた。

しかし――赤ん坊は動かない。

追いかけようという素振りも、次元を倒そうという素振りも見せない。

ただ、次元から離れた場所で、口を開く。

「どこを狙ってるんだ？ 的は俺じゃねーぞ」

「は……？」

「的は、あれだ」

小さな手が、次元の後ろを指差した。

容易に相手の言葉に従うのは危険だが、一応首だけを後ろに動かし、銃口は動かさずにその方を向く。

赤ん坊の言う的。それらしきものは、確かにあった。

こんな庭に不自然に、空き缶が置かれているのである。あれを的と言わず、何て言おう。

距離は五メートル強か。

「あれを撃てってか？ 別に撃てねー距離でもないぜ」

次元が顔を戻すと、赤ん坊は笑みを深めていた。

「ただ撃つんじゃないやねえ。俺と早撃ち勝負しようって言ってんだ」

「ほう……」

次元は片眉を持ち上げた。

「おまえ、赤ん坊のくせに随分自信ありげだな」

「まーな。何せ俺は、世界最強のヒットマンだからな」

そう豪語した後、赤ん坊は「それに」と付け加えた。

「ただの早撃ちじゃあ面白くないだろ？」

「……？」

「ちょっとした障害がなきゃ燃えねーぞ」

言下と共に、後ろで新たな気配が現れた。

振り返ると、今度は缶より更に離れた場所に、一人の青年が立っているのが見えた。

灰がかった銀髪に緑の瞳、顔立ちは整ってはいるが、目付きはやたらに悪い。

写真で見た例の――嵐の守護者、スモークンボム・獄寺隼人だ。

「……なるほど、さっきのダイナマイト煙幕はおまえのか」

「まあな。別にダイナマイトは戦闘のみに特化した武器じゃねーし」  
気軽に言われた言葉に、気軽に応じる。しかし、間にある雰囲気

は痛いぐらい殺気立っていた。

「落ち着け、獄寺」

と。赤ん坊が獄寺をいさめた。それに対し、獄寺は表情を改める。「解ってます、リボーンさん。こいつの相手はリボーンさんですからね」

赤ん坊に対する敬語など、何ともこっけいだ。

いや、それより今、リボーンって……

「……おいおいおい」

次元は唇をゆるめた。だが、頬にはつ、と冷や汗が伝う。

「何だって世界一の殺し屋が……最強の赤ん坊、アルコバレーノがここにいんだよ」

アルコバレーノ。赤ん坊でありながらその名をとどろかす強者達。マフィアではなくとも、裏社会に身を置いている次元は当然リボーンの名は知っている。

いや、例えアルコバレーノのことを知らなくても、狙撃手としてリボーンの名なら知っていたであろう。

それほどまでにリボーンは殺し屋としての名をはせている。

その銃撃に迷いも狂いも無い。まさに百発百中——否、一発必中と言わべきであろう。

しかし、彼はフリーの殺し屋のはずだ。なぜボンゴレにいるのだろう。雇われているのだろうか。

「なるほどな……こんなところで世界一のヒットマンと早撃ち対決できるとは。幸か不幸か」

次元は銃を下ろした。

「だがよ、なぜその必要がある？ 銃撃戦おっぱじめるならともかく、タマの取り合わねー早撃ち対決なんてよ」

「ボンゴレX世の考えでな。俺に勝てば、もしくは認められれば——ちよっとした依頼をしたいんだ」

リボーン言葉に、次元は眉をひそめた。

「何だ？ その依頼ってのは」

「まだ明かせねーぞ。それに、これはただの早撃ち対決じゃねえ」  
リボーンは獄寺に目配せした。

獄寺は頷くと、両手にダイナマイトを握った。

「……!？」

「ダイナマイトが爆発しまくるフィールドでだ」

リボーンの言下と共に、獄寺がダイナマイトを投げた。

地面に触れる直前に連続で爆発していくダイナマイト。次元は思わず身を引いた。

「な……!」

「ダイナマイトが爆発し、荒れ狂うフィールド——この嵐のフィールドで、空き缶を狙うぞ」

爆風をものともせず、リボーンはずいっと前に出た。

「む、無茶言うな! こんな爆風爆炎の中でっ」

「だからこそだぞ」

リボーンは懷から銃を引き抜き、ニツと笑った。

「無茶な状況下でも正確に的を射抜けなきゃ、依頼をする意味がねえ。それとも、おめーは自信が無えのか? おめーの腕は、その程度か?」

「……!」

次元は帽子に隠れた目を見開き——はあとため息をついた。

「……んなこと言われちゃあやるしかねーな。ったく、五エ門のこと言えねえや、こりゃ」

次元は銃を、爆風に隠れて見えない空き缶に——否、的に向けた。狙撃手として、リボーンの言葉は火をつけられるのは充分だった。「決まりだな」

リボーンは笑みを更に深めた。

ダイナマイトは今もなお、獄寺が絶え間無く放っている。

どこから出してるのかどっか異次元に繋がってんのかとか思わなくもないが、今はスルー。

自分がやるべきことは、的に撃ち抜くこと。

この赤ん坊より、早く、速く――

爆風と爆炎で視界はほとんど防がれている。

しかし次元は、それを気にしない。

気にも止めないほど、集中していた。

そして二人の狙撃手は。

ズガアアアアアンツ

的に向けて弾丸を放つ。

――

銭形は唇を噛んだ。

自分は警察だ。犯罪者を捕まえる誇り高い警察だ。

なのに何で。

「ふん、こんなもんか」

自分達が逆に、手錠をかけられているんだろう。

手首足首にかけられた黒い手錠は思いのほか頑丈で、銭形の力ではひきちぎることができない。

「くそっ……貴様、公務執行妨害だぞ！」

「知らないよ、そんなの」

ばっさり切り捨てる黒髪の青年。その後大あくびをもらした。

「ふあああ。もう向こうは着いたかな。侵入者対策システム切るから僕らも出なきゃいけなくなったんだし、草食動物には今度戦ってもらうかな。それにしても」

青年は見下ろした。

銭形だけでなく、同じように地面に伏した彼の部下達も。

誰も彼もが、銭形と同じように手足首を黒い手錠で封じられたり、攻撃を受けて気を失ったりしていた。

何が起きたのか、誰も理解してないだろう。

しかし銭形だけは理解していた。

ルパンのライバルとまで言われる彼である。頭脳だけでなく、身体能力に関してもずば抜けて高い。

だから彼の動きは目で追うことができた。

できたが――動けなかった。

頭が付いてきても、身体が追いついていなかったのだ。

それほどまでに、この青年の実力は規格外で、埒外だった。

「くそっ……貴様一体何者なんだ!？」

銭形の質問に、青年は眠たげな視線を向けた。

おそらく本当に眠いのだろう。彼はもう一度あくびをもらして名乗った。

「僕は雲雀恭弥だ。一応君の名前も覚えておくよ、銭形幸一警部」

## 到着の先

激しく刃がぶつかり合う。それこそ火花を散らし、近付くのをためらうぐらいに。

そんな激戦を繰り返していた山本と五エ門は、互いの刀をぶつけ合い、その反動で間合いを取った。

二人共、息は切れていない。常人から見れば、無尽蔵の体力だった。

しかし二人にしてみれば、この程度小手調べである。

——周りの被害は尋常じゃないが。

近くにあった木はほとんど薙ぎ倒され、屋敷の壁もところどころ欠けている——というか砕けている。

ツナがこの惨状に頭を抱えるまで、あと二時間。

「……さすがだな」

と。山本はにかつと笑って五エ門に声をかけた。

「俺とこんだけやり合えるの、剣士に限定したら片手で数えられるぐらいしかないぜ」

「ふっ……その中に拙者も入れてくれるとは、光栄だな」

五エ門も笑い返す。

しかし言葉はなごやかだが、彼らの間にある空気はびりびりと痛いぐらいの殺気が流れていた。

常人がいたら卒倒するか、それでなくても立ちすくんでいただろう。同時に、冒頭に書いた通り近付くのをためらってしまう。

ルパン達や、ツナ達ですら立ち入れない。二人の放つ雰囲気はそういう種類だった。

——まあどこにでも、空気の読めない者がいるのだが。

「さて、口で語るより、我々は刀で——己が剣術で語るべきだろう。……そろそろ本気で行かせてもらおうぞ」

「ああ。俺もマジでやるぜ」

空気が更なる緊張感を得た。

剣士二人は空いた間合いを詰めるように走り出した。

再び始まる剣撃戦。もはやそれは、異常とさえ言える戦いだった。そこで五エ門は少しだけ顔をしかめる。

己の刀は、全てを斬り裂く刀だ。普通の刀なら斬り結ぶことさえ不可能だろう。

無論、山本の實力ならうまく剣撃を受け流すことなど造作も無いだろう。

しかし数合もすれば齒こぼれが生じるはず——なのに。

（實力に見合う刀を持っているということか）

しょせん刀は消耗品。達人ならどんななまくらでも痛めず扱うことができるが、しかし時たま刀が使用者の實力についていけない事態が起こる。

だからこそ五エ門はこの刀を——斬鉄剣を求めた。

刀が所有者を選ぶと言うが、まさに五エ門は斬鉄剣に選ばれたのだ。

山本の刀もそうなのではないか。

彼の刀も彼の實力に見合った刀であり——彼を選んだ刀ではないだろうか。

そんなことを考えていたためか、五エ門は僅かな隙ができた。

山本が、それを逃すわけがない。

時雨蒼燕流、攻式・八の型——

篠突く雨。

時雨蒼燕流の技が、五エ門の身体を狙った。

「ぐおっ!？」



五エ門は寸前で回避する。が、かわしきれなかった。腹の部分を浅く斬られ、うっすらと紅い線がにじむ。

だが、五エ門もまた山本に反撃をしていた。

山本が攻撃をし終わった瞬間、五エ門はすぐさま間合いを詰め、山本の顎を狙って刀の柄頭で打つ。

「っ……!？」

山本は上体を後ろに投げるが、五エ門と同じく避けきれずに顎をかすめた。

五エ門は更に手首を返して刀を振り上げる。そのまま、左下から右上へと山本を斬り裂こうとした――

ドガガガガガガッ

――が、失敗した。

いきなりの爆発音に、双方動きを止める。数瞬して互いに間合いを開けた。

「……何の音だ？」

五エ門は片眉を上げた。

近く――ではない。離れた場所から聞こえてくる。

確か守護者の中にはダイナマイトを扱う奴もいたはず。まさかそいつか？

「向こうも始まったか」

と。山本がまるで爆発音が聞こえてくるのが解っていたかのようなことを言った。

五エ門は驚いて、彼の顔を見つめる。

「一体……どうしたことだ？」

「……もう話してもいいかな」

山本はふう、とため息をついた。

「実はさ、俺達はあるんだ達を試しているんだ」

「試す？」

「俺が本気であんたと戦いたかったのは本音だけどさ、あんたの実力を見るのも俺の役目なんだ」

山本は刀を下ろし、自然体になった。先程までの闘気は、綺麗さっぱり消えている。

「俺達のボスがさ、あんた達に頼みたいことがあるんだって」

「頼みたいことだと？」

「ただ実力が解らなかったからこうして試すことにしたんだ。あんたは合格だよ。……なんて上から目線で悪いな」

山本はハハッと笑い、未だ続く爆発音の方を見た。

「多分向こうでは、あんたの仲間……次元だっけ？ その人が獄寺と小僧に試されてるはずだぜ」

「小僧？」

獄寺は守護者の一人だが、小僧とは誰だろうか。

そこで更に、五エ門は別の疑問に思い至った。

「ルパンは？」

「ん？」

「ルパンも誰かに試されるのか？」

五エ門の問いに、山本は「ああ」と頷いた。

「正直なところ、ルパン三世に全てがかかってるかな。ツナが――俺達のボスが試すことになってるんだけど」

大丈夫かなー、と、どこまでものんきな山本だった。

――

爆発音に銃声はかきけされた。

しかし確実に、銃弾は的を貫いていたはずである。

なぜなら、ダイナマイトの爆風でも揺るぎもなかった空缶は、獄寺の後方へとぶっ飛んだのだから。

「……どっちが早かった？」

次元は銃を下ろしてた。

「俺達じゃ解んねーな。獄寺、どうだ？」

リボーンもまた、銃をしまつて獄寺に尋ねた。

「俺から見たら、ほぼ同時に見えましたが……」

獄寺はダイナマイトを放つのを止め、空缶を取りに行った。

缶を拾い上げ、じっと見つめる。

おそらく、缶の中には銃弾が一つあるはずだ。使っている銃の種類が違うので、どっちの銃弾か解らなくなるということはないはずである。

しばらくの沈黙。獄寺が顔を上げた。

「リボーンさん」

「ん？」

「銃痕が二つあるんですが……」

もしほんの数秒、いやほんの数コマでもどちらかが早ければ、缶はずれているはずである。つまり、狙いもずれる。

いくら精密な射撃技術を持っていたも、直前に狙いがずれば外れてしまうのだ。

つまり——二人の弾丸は、同時に着弾したことになる。

そんな奇跡めいたことが起こるなんてことは想定外だったんだろう。獄寺の顔には信じられないと書かれていた。

しかし、予想していなかったのは次元も同じだ。まさか同着になるとは。

「決まりだな」

唯一驚いていないとすれば——リボーンぐらいだろう。

「合格だぞ、次元。おめーの実力は本物のようだな」

「……」

賞賛されたものの、次元は素直に喜べない。

なんというか、本当に引き分けなのかと疑ってしまう。

プラスではなく、マイナスの意味で。

自分はこの最強と呼ばれる殺し屋の恐ろしさを一分も味わってないのではないかと——

（考えてもしょうがねーか……）

とりあえずこの勝負で自分は負けなかったのだ。今はその事実だけいい。

「で、俺達に頼みたいことってなんだ？」

次元は身体の強張りを解いて、しかしある程度の緊張感は保ったまま訊いた。

「ああ。しかし、話すのはもう少し後だぞ」

リボーンは小さな肩をすくめた。

「まだルパン三世の実力を試してねー。それはボスの役目だがな」

「……」

どうやらルパンがボンゴレX世のところに行くことも彼らの策略の内らしい。

……気に入らない。

大ボンゴレが相手とはいえ、自分達がいいように手玉にとられている。読まれている、と言ってもいい。

しかしここまで正確にこちらの動きを予測するなんて――

「よっぽどあんたらボスは頭がキレるらしいな」

次元は煙草を出して火をつけた。紫煙をくゆらせ、リボーンを見下ろす。

すると、リボーンは意外なほどよく似合うニヒルな笑みを浮かべた。

「いや、あいつ自身は普通の人間だ」

「ん？」

「どこまでも普通で平凡な男だ。しかし、人を見る目はある」

仮にもボスを、上から目線で褒めるような口調だ。いまいち、彼とボンゴレボスの関係性が掴めない。

「そして適材適所を見抜くことのできる男だぞ」

「……」

「ルパン三世は、あいつの眼鏡にかなうかな？」

試すような――ルパンだけでなくボンゴレX世も試すような口調

だった。

おかしい、とルパンは感じていた。

どうも、誘導されている気がするのだ。

ところどころ非常用のシャッターが閉まっていたり、いないと思っ  
ていた見張りがいたり。

頭の中に入っているボンゴレ邸の地図と照らし合わせて見て、自分  
は間違い無くボンゴレボスの部屋に向かっていると確信できる。

できるだけ――疑いの念は強くなった。

だいたいさっきは邪魔が入ったというのに、今はスムーズ過ぎる  
ぐらいスムーズだ。

これではまるで、次元達と引き離されたようではないか。

もし勘違いでなければ、自分は虎の穴に向かっているのではないか  
……そう思えてきた。

今からでも引き返そうか。しかしそれはすでに考えていたし、実  
行もした。

だが――できなかった。

意図的なのか偶然なのか、引き返そうと道を戻ると、必ず何らか  
の要因で道を防がれているのだ。戻りようが無い。

やはり勘違いではないのか。明らかに、自分は誘い込まれている。  
(……それでも、俺はかいくぐってみせるさ)

自信を持って、ルパンは進む。足取りに迷いは無い。

やがて彼は、ある扉の前に至った。

他と大差無いように見える扉。しかしよく見ればさりげなく装飾  
されている。

間違い無い。ここがボスの部屋だ。

ルパンは耳を澄まし、じっと中の気配をうかがった。

人の気配は――ある。一人だ。あの男だけかと思ったが、しかし

影武者の可能性も否めない。

前回会った時、油断できない相手と解ってから、ルパンはボンゴレX世に強い警戒心を持っていた。

いったん天井裏かどこかに身を隠すか——そう思っていると。

「入って来ないんですか？」

いきなり中から声がかかった。

気配を消していたのに、気付かれていた。しかもこの声は——本人だ。

ルパンはどうすべきか一瞬迷った。

逃げてもいいが、退路はやはり防がれてるだろうし、ここまで来て盗まず逃走するのは、己の名がすたる気がした。

「……」

ルパンは無言で扉を開け、部屋の中に入った。

「こんばんは、ルパンさん」

部屋の主——ボンゴレX世、沢田綱吉は穏やかな微笑を持ってルパンを迎えた。

「……よお。久しぶりってほどでもないな」

「そうですね。あ、警戒しなくても部屋には俺一人ですよ」

ボンゴレはにこにここと、こちらが身構えなくなるぐらい友好的な笑みをたたえていた。

ルパンは視界の端で、彼の指にはまった指環を確認する。

「用件は、解ってるよな」

「はい。ボンゴレリングですよ。でも、簡単に手に入れられると思いますか？」

「ぜんぜん。むしろ返り討ちされちゃうだろうな」

勿論そうならないための手は幾つか打っているが、しかしどこまでこの男に通じるか、ルパンは未だ計りかねている。

この男は底が知れない。僅かに話した時は優しい、優しすぎる男

という印象を受けたが、それが彼の本性とは言えないのだから。

ただ、ルパンは次のボンゴレの言葉に、全ての警戒心とこの時のために打った全ての手を、一瞬忘れることになる。

「俺と勝負しませんか？」

「……は？」

「俺と勝負するんですよ。貴方が勝てばボンゴレリングはあげます。ただし、負けた場合は貴方にこちらの依頼を無条件で受けてもらいたい」

「は？　ちょ、どういうこと？」

「そのままの意味ですよ。そうですね……ポーカーなんてどうでしょう？　賭事をするにはもってこいの勝負ですし」

ボンゴレの表情は変わらない。悪気も邪気も無い笑みのままである。

しかしその提案は突拍子もないことで、ルパンはぽかんとするしかない。

しばらくの間、ルパンは何も言わず突っ立っていた。

## 到着の先（後書き）

ツナVSルパンはポーカー戦で。

山本VS五門は……いつかに持ち越し（いつかっというだ  
次回は動き全く無いかと思われます。

では！



## ポーカ―

妙なことになった、とルパンは思った。

前にも同じ感想を抱いた気がするが、そこは気付かなかったことにする。

とにかく、もしボンゴレX世の言葉を額面通りに受け取るなら、これは自分にはいい方向に向いている。

額面通りに受け取るなら、の話だが。

ルパンとボンゴレは丸い、少し大きめの机をはさむように座った。「ディーラーは無し。一对一の勝負ということですね？」

「ああ。構わねーよ」

むしろその方が自分にとって都合がいい。向こうはどう思っているか知らないが。

ルパンはボンゴレが用意したトランプを見つめた。

「じゃ、配るのは俺でいいですか？」

「おう」

ルパンが頷くと、ボンゴレはトランプを箱から取り出し、ジョーカーを二枚抜いた。

「あ、そういえば」

ルパンは幾つか、確認したいことを思い付いた。

「今回賭けるのはボンゴレリングだけだよ、他に賭けるもの――つまり上乗せはあるのか？」

「レイズ……ああいえ、ありません。賭けるのはこれ一つです」

ボンゴレは少しだけ眉根を寄せた後、得心のいった顔で首を振った。

「んじゃ、途中で降りるのは？」

「それは構いませんよ。あと、カードの交換は一度でいいですか？」

「おう。しかし……もしかしてボンゴレよお、ポーカーは初心者か？」

ルパンがからかうように言うと、ボンゴレは頬をかいいた。

「ええまあ……すみません、ぎこちなくって」

そう言ってカードをシャッフルする。その手つきだけは手慣れたものである。

彼は高校卒業まで、日本で一般人としての生活を送っていた。おそらくポーカーは不慣れでも他のカードゲームはやったことがあるのだろう。普通の学生だったなら、友達とトランプで遊ぶことはさほど珍しくない。

「……」

普通の学生。彼はつい一年前までそうだった。

ボンゴレを継ぐことは解っていたろうし、そのための教育も受けていたろうが、しかし生活自体は一般人と変わらなかったらしい。

集めた情報が本当なら、そして今も感じられるこの印象と雰囲気  
が真実なら、彼はマフィアのボスにはふさわしくない。

合わないとかそういうものではなく、らしくないのだ。

例えばボンゴレに誰彼も惹き付けるカリスマがあつたとしても、それでもやはりふさわしいとは思えない。

それぐらい普通過ぎた。一般人めいていた。

いや、ある意味一般人の基準からずれてるかもしれない。それぐらい彼は平凡だった。

そんなことを考えていると、ボンゴレがシャッフルを終えて互いの前に五枚ずつ配り、残ったカードを中心に置いた。

ルパンはカードの柄を確認し、トランプの束を見やる。

「それじゃあ、俺から交換させてもらうかね」

ルパンはカードへ手を伸ばした。

カードの交換は一度。しかしカードの枚数は決められていない。ルパンはカードを二枚引いた。ボンゴレは一枚。

ルパンはその様子を見送った後、自分の手札を確認する。先程引いたカードで組むと、Aのフォアカードだ。

できることなら確実に勝ちに行きたい。Aとはいえ、フォアカードでは少々弱いかな。

ルパンはボンゴレの表情をうかがいながら、トランプの柄を見た。普段よく自分が使っているカードと同じだ。無論色も同じである。これはただの偶然か、はたまた何かの罠か。

罠だとしたら、やはり確実に勝てる手札で勝負したい。

だとしたらストレートフラッシュ、いやロイヤルストレートフラッシュか。

だがロイヤルの方だとイカサマだとバレるかもしれない。例えばポーカーの素人とはいえ、相手はまがりなしにもボスなのだから。

(うまくやらねーとな)

ルパンは袖に仕込んだトランプと手の中の手札を入れ換えた。

これで、ダイヤのストレートフラッシュ。

ダイヤにしたのは、皮肉ったのだ。

泥棒である自分と、ボンゴレリングを持つ沢田綱吉を。

盗む者と、盗まれる者。

「いいですか？」

「ああ、勿論だぜ」

互いに目線を合わせ、手札を表にして机に並べる。

ルパンは先程組んだ通り、ストレートフラッシュ。

ボンゴレは——キングのフォアカードだった。

「……」

何だ、入れ換えなくても勝てたじゃねーか。

ルパンは内心で脱力した。当然表情には出さない。

ボンゴレの方を見ると、最初は目を見開いていたが、やがてゆるゆると微笑んだ。

「負けました。引きがいいんですね」

「まあな」

ルパンは心なし胸を張った。

実際はイカサマのテクニクがうまいのだが。

「それじゃあ約束通り、これを」

ボンゴレは指からボンゴレリングを引き抜き、差し出した。

ボンゴレボスの証——大空のリングだ。

「他のリングに関しては、守護者達に話はつけてます。これを見せれば、他のボンゴレリングを渡してくれるはずです」

「ふうん。ご苦労なこった」

ルパンはリングを受け取り、そう返した。

「んじゃ、他のリングもちょうだいさせてもらうぜ。じゃあな」

「ええ。さよなら」

別れの挨拶を背中に受けながら、ルパンは釈然としない気持ちだった。

こうもあっさりボンゴレリングが手に入るなんて、妙だ。

今までの攻防戦は何だったんだか……

「……………」

ルパンは扉に向かっていた足を止めた。

「……おい、ボンゴレ」

「はい？」

「てめえも人が悪いな」

ルパンは振り返り、苦微笑を浮かべた。

「これ……偽物だろ？」

「……」

「まあ実物は見たことねえから自信はねえがよ……写真でさんざボンゴレリングを見たんだ。間違いねえ」

「……」

「てめえ、俺らを試したな」

「…………ふう」

ボンゴレはため息をついた。

「バレましたか。いえ、バレることを期待していたんですが」

「……期待？」

「貴方の言う通り、俺達は貴方達を試しました。実を言うと、ポーカー自体は建前なんですよ。貴方が偽物に気付くかどうかが重要だったんです」

ボンゴレはカードを一枚引き、それを軽く振った。

「最初から貴方が勝つよう仕組んでいました。でもまさかAのフォアカードからストレートフラッシュに変えるとは思ってなかったの  
で、多少驚きましたけど」

「さっきのは負けたことに対する驚きじゃなかったのかい。しかもその口振り……おまえもイカサマしてたのかよ」

「負けるためのイカサマですけどね」

ボンゴレは苦笑して頬をかいた。しかしすぐ表情を引き締める。

「こんなことを仕組んだのは、ある理由があったんです」

「ある理由？」

「貴方に、あることを頼みたいんです」

ボンゴレは真剣な顔付きで立ち上がった。

そして驚きの言葉を口にする。

「俺の仲間を……行方不明になった仲間を、盗んできて欲しいんです」

## ポーカ―（後書き）

もうちょつと長く書くつもりが……短かったです；；  
多分次の話は今回以上に投稿が遅くなると思います。  
では、感想評価お待ちしております！ また次回！！

## 急展開はいつも突然に

「どういう、ことだ？」

予想外の提案に、さしものルパンも戸惑った。

しかしボンゴレの表情は真剣だ。目も、冗談を言っている目ではない。

実に馬鹿馬鹿しい提案だが、どうやらふざけているわけではないらしかった。

「……詳しい話を聞かせてくれないか？」

「勿論です。……隣の部屋に来てください」

ボンゴレは頷き、別の部屋に繋がっているであろう扉に顔を向けた。

長机をはさむように置かれた二つのソファーにそれぞれ座ったルパンとボンゴレは、数秒無言だった。

先に口を開いたのは、ボンゴレである。

「これ、何だか解りますか？」

ボンゴレはポケットからあるものを取り出した。

指環である。細い鎖で繋がった、二つの指環だ。

一つは第一間接を覆うぐらい大きく、それに対してもう一つはシンプルだった。だが、見ただけでもそれがかなりの価値があることが解る。

「……何だ、それは」

惹かれるものがある。だが手にするのはためられる、そんな印象を受けたルパンは、慎重に尋ねた。

それに対するボンゴレの答えは、ルパンが驚愕するに充分足るものだった。

「これが、今のボンゴレリングです」

――

「……遅えなあ」

山本が呟いた。

「十代目のことだから、連絡を忘れていることは無いだろうが……」

隣の獄寺も、不安げに眉間にしわを寄せる。

「まだルパンって人と話してんじゃねーのか？」

「かもな」

山本の言葉に、獄寺は肩をすくめる。

ボスに対する対応の違いこそあれ、二人は沢田綱吉のことを本当に心配しているようだった。

一方、次元と五エ門は無言だった。

警戒して山本と獄寺から距離を置いているが、その必要が無くなっていることは理解している。

彼らは自分達の力が必要なだけであり、危害を加える気は無いらしい。例えば手が組めなくても、そのまま解放すると言っていた。

おそらくそれは事実であり、本心だろう。見れば解る。

ただ、問題は――

「ルパンの奴、ちゃんと見抜けてるかねえ？」

次元がタバコに火を着けながら言うと、五エ門がそれに答える。

「あいつの目利きは我らの知るところだ。問題あるまい」

「ああ……いや、偽物じゃなくてよ」

次元は手を軽く振り、五エ門の言葉を否定した。

「ボンゴレリングの姿が変わってるってことだよ」

「ああ……そういうことか」





「おまえ達自身の意志でか？」

「俺達の意志です」

ボンゴレははっきり、ルパンをまっすぐ見据えて言い切った。

裏社会には見られないその純粹過ぎる瞳に、ルパンの方が戸惑ってしまふ。

デーチモ  
「X世さんよお」

「ツナでいいですよ」

「……ツナよお、前回会った時もあったが、おまえマフィアらしくないな。裏社会の人間らしくもねえ……何なんだ、おまえは」

「えっと……確かに肩書きは凄いいけど、俺自身は全然凄くないですから……そのせいかなくって」

ボンゴレ——否、ツナは顔を少しだけうつむかせた。

「……話を戻します。さっきも言いましたが、貴方には仲間を盗んできてほしいんです」

「仲間……もしかして、霧の守護者か？」

ルパンはなんとなしに言ってみた。しかし確信はある。

彼の口振りから察するに、おそらく守護者の一人が行方不明なのだろう。そしてそれは、霧の守護者に違いない。

それなら、霧の守護者に関する情報が無いことに説明が付く。

そしてそれは、ボンゴレの敵対組織によるものなのだろう。ならば、盗んできてほしいという発言も解る。

「つまり、俺達に霧の守護者を救出を依頼したいわけだな？」

「その通りです」

ツナは少しだけ驚いたようだった。

見くびられては困る。これでもこちらは、大泥棒で通っているのだ。

ルパンがじっと見つめていると、ツナはまた、ポケットから何かを取り出した。

イヤリングだ。四つの針のような飾りが付いている。ツナのリングと同じ印象を受けるそれを見て、ルパンは目を丸くした。

「それ、もしかして……」

「はい、ボンゴレリングです」

「……指環でも何でもねえ」

ルパンは額を押さえた。

「今、ボンゴレリングはV<sup>ボンゴレギア</sup>Gと呼ばれています。これは、元は霧のリングでした」

「そうかい。……ん？ 確かリングはそれぞれ守護者がもってるはずだよな？ 何でボスのおまえが持ってるの？」

ルパンの疑問に、ツナは軽く目を伏せた。しかしすぐ、目を開ける。

「敵の狙いはボンゴレリング——もとい、VGです。霧の守護者はそれに気付いて、捕まる前にこれをこっちに送ってきたんです。よっぽど追い詰められていたんでしょう。でなければ、これを手離すなんてことしなかったでしょうから」

「なるほど」

「霧の守護者が行方不明なのは、下には伝えてません。余計な混乱はさけたいので。もともとボンゴレにあまりよりつかなかったから、今のところ誤魔化せてます」

「ふうん……あ、そういうえば、前に霧の守護者は部下じゃないって言ってたけど、ありやどういう意味だ？」

ルパンはふと思いついたことを口にした。それに対し、ツナは苦笑を浮かべる。

「別に……深い意味はありませんよ」

「んじやどういう意味よ？」

「俺にとって守護者は部下じゃありません。……大切な仲間なんです」

そう言つて、ツナは笑みを照れくさそうなものに変えた。頬は微妙に赤い。

ルパンは今度こそ絶句した。

何だ、この男は。裏社会に置いては、子供ですら浮かべない表情

だぞ。

ルパンはまた額を押さえつつ（頭痛がしてきたのだ）、話を変え  
ることにした。

これ以上この話を続けると、毒されそうだ。いや、この場合毒気  
を抜かれるか。

「それで……霧の守護者を捕まえたってヤローは、一体どこのどい  
つだ？」

「……実を言うと、ルパンさんにも関係がある人なんですよ」

ツナの真剣な声に、ルパンは「は？」と対比的な間の抜けた声を  
上げた。

「俺に関係あんの？」

「はい。ルパンさん側は知らないかもしれませんが、情報によりま  
すと向こうは一方的に敵意を持ってるみたいです。ルパンさんの命  
を狙っている節もあります」

「なんだそりゃ!？」

ルパンは驚いて腰を浮かせた。

「俺は恨まれる覚えは……あるけど、命取られる覚え……もあるな、  
うん」

「どっちですか」

ツナはあきれ顔になった。

「まあともかく、そういった理由もあって、俺は貴方に協力をお願い  
したいんです」

「……つまり、俺達が霧の守護者を救出する代わりに、ボンゴレが  
俺達を保護するってわけかい」

ルパンがそう言うと、ツナは頷いた。

「そうです」

「なめられたもんだなあ、俺達も」

ルパンは頭をかいた。しかし、否定はできない。

確かにツナの言う通り、ボンゴレを敵に回すほどの奴らを相手取  
るのはかなり厳しいだろう。

第一正面きつての勝負ごとは、五エ門はともかくルパンや次元には分が悪い。捕まえるつもりはあっても殺す気は無い銭形を相手にするのは、わけが違ふ。

おまけに彼の言いようだと、敵はかなり強いようだ。ルパン達でも、出し抜かれるかどうか解らない。

知恵———というか悪知恵なら負けない自信がある。むしろ勝てる自信がある。

しかし腕っぷしとなると、高レベルの実力者相手はかなり厳しい。「……ちなみに、その敵って誰だよ？」

名前を聞いたらもしかしたら何か解るかもしれない。ルパンはそう思って尋ねる。それを受け、ツナは口を開こうとした———が。

ドガアアアアアアアアアアアアンツ

突如、屋敷全体を震わせるような爆音が響き渡った。

「な、何だ!？」

「爆発!？」

二人は立ち上がり、顔を見合わせた。

「外から……だ」

ツナは小さく呟くと、だっと走り出した。

「!？」 どころくんだよ!」

「爆発のところですよ!」

ツナはそう言って部屋を出て行ってしまった。

即断即決。そう言うには、少し軽率な行動と言えた。

巨大組織のボスが、こうもすぐ動くべきでないだろうに。部下ではなく仲間。

つまりは———そういうことなのか。

取り残されたルパンは一瞬呆然としたが、頭をかきむしった。

「あー、ったく! 話はまだ終わってねーぞ!」

ルパンはツナを追いかけて、その部屋を後にした。

獄寺達は動けなかった。

予想外の自体に全く動じない人間が、この世に何人いるだろう。

しかしそれにすぐ冷静になれる人間は、それなりにいるはずだ。

そしてその場にいる全員は、そのそれなりにいる人間だった。

それぞれ自身の武器を構え、来るであろう敵を迎え討つべく前を見据える。

崩れた外壁。その際巻き起こった土煙のせいで、敵の姿は見えない。

敵の姿は。

ボオオッ

しかし、煙から炎が吹き上がったのは見えた。赤い、紅蓮の炎だ。

「ありゃあ……」

「嵐属性の炎か!？」

獄寺と山本は目を見開いた。一方、次元と五エ門は眉をひそめてこちらを見ている。

しかし、それに答えてはられない。むしろ、彼らを戦わせないようにするのが優先すべきことだった。

「下がってろ! あんたらじゃ奴とまともに戦えねえ!!」

「な……どういことだ、スモークンボム!」

次元が声を荒げて言い返してきた。

「いいから今は下がってんだ! 死にてえのか!？」

「獄寺、お出ましだぜ」

山本の声に獄寺は意識を敵に向けた。

敵は、黒いスーツを着ていた。

顔はサングラスを付けているため解らない。がたいのいい男。そ

れが十人ほどいる。

全員、その手には炎を灯した武器を持っていた。赤、青、黄色、紫——色とりどりの炎が、彼らを照らしていた。

「誰だ、てめーらは」

獄寺は低い声で尋ねた。

しかし、獄寺には答えは解っていた。

この襲撃方法といい、おそらく彼らは——

「我々は——『黄昏の烏』」

一人が——おそらくリーダー格であろう男が、質問に答える。  
それは、獄寺の予想した通りの答えだった。

## 急展開はいつも突然に（後書き）

二ヶ月も放置して申しわけありません；；お久しぶりです、沙伊です。

本当はもう少し長く書きたかったんですが、キリのいいところがあんな感じでして……

きつと次もかなり長い間放置しちゃうと思います。そこはご容赦を……！

では！！



## 戦闘開始、そして

爆発音に、雲雀は顔を上げた。背を預けていた壁から離れ、目を細める。

このタイミングで爆発――例の組織と考えるのが自然だろう。どうやら今回の件、ルパン三世だけでなく招かれざる客まで呼んでしまったらしい。

「お、おい！」

と。歩きだそうとした雲雀は、足元に倒れた銭形に声をかけられた。

「……何」

「お、俺も連れていけ！」

奇異なことを言う、と雲雀は思った。

もしや今の爆発がルパン三世が引き起こしたと思っているのだろうか。だとしたら短絡的と言える。

「君に何ができるっていうんだい？ 嫌だよ。その拘束を解く気は、まだ無いしね」

雲雀は視線を、銭形の手足を封じる手錠に向けた。

刑事が手錠で動きを止められているというのは、実に皮肉な絵である。

「このっ……これは公務執行妨害だぞ！ 今すぐ外せー！！」

「やだ」

「即答！？ いや、本当に外せ！ 俺はルパンを捕まえる義務がある！！」

どうやら本当にルパン三世が引き起こしたと思ってらしい。雲雀はため息まじりに言った。

「言っとくけど、今のはルパン三世が起こした爆発じゃないよ」

「……何？」

銭形はいぶかしげな顔をした。

「なら……この爆発音は？」

「君に教える義務は無いよ」

雲雀はそう言っただけのまま立ち去ろうとした。

「ま、待て！ 置いていくな！！」

這ってでも付いていこうとする銭形。これにはさしもの雲雀もあきれた。ここまで来ると、逆に感心したくなる。

——この男、確かそれなりに顔が効くはずだ。

雲雀は彼に関する情報を思い出す。ならここで貸しを作るのも一つの手だろう。こいつを利用して、コネを作るのも悪い手ではない。雲雀はそう考え、「解った」と一つ頷いた。

「いいよ。連れて行ってあげる。ただし、拘束を解くのは君一人だ。それでもいいかい？」

「あ……ああ！ 助かるっ」

銭形は雲雀の考えなど露知らず、頭を下げた。

まさか今後のことに利用されるなど、誰も思いもしないだろうが。銭形の拘束を解くために彼に近付きながら、雲雀は思う。押しかけてきた草食動物は少しは、楽しめるかな——と。

——

獄寺、山本は武器を構える。

彼らはさっき、『黄昏の鳥』と名乗った。それは例の、トゥリニセツテを狙う連中の名だ。勿論同じ名をかたる偽者という可能性もあるが——しかし。

「……なめられたもんだぜ」

獄寺は男達を見渡し、顔をしかめた。

「この人数で俺達に勝てると思うかよ」

「勝てる」

男の一人が、自信ありげに笑った。  
はったりか、それとも――

「……山本」

獄寺の声に、山本は「ん？」と反応した。

「何だ？」

「奴ら、何か隠してるかもしれねえ。様子を見るから少し下がってろ」

「解った」

山本はあっさり身を引く。勿論すぐ対応できるためだろう、刀は構えたままだった。

獄寺はそれを見送った後、男達に向き直った。

「おまえらの自信が本物かどうか」

即座に身体に仕込んでいたダイナマイトを両手にそれぞれ三本ずつ持ち、すぐさま放り投げる。

「試させてもらうぜ！」

言下と共に、ダイナマイトの下から火花が飛び出した。

ロケットボム。

推進力を上げ、曲がることも可能になったダイナマイト。

それが、スピードを上げて男達に向かっていく。

まずは小手調べだ。

奴らの自信のものが何か、これで探る――

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガッ

連続した爆発音と吹き上がる爆煙に、一時視覚と聴覚が塞がれる。

「どうだ？ やったか？」

「いや、まだ解らねえ」

山本の質問に、獄寺は首を振った。

「まさかただのダイナマイトで死ぬ気の炎を使う奴らがやられはしねえだろうが……引いた様子もねえし」

「お、おい！」

次元と五エ門が走り寄ってきた。下がっていると言ったのに、と、獄寺は顔をしかめる。

「おいあんたら、あぶねーから下がってろつつたろ！」

「おまえこそ、自分達のアジトで何やってんだ!？」

「どうせ壁壊されちまってんだ。それにダイナマイトごときで壊れる壁じゃ……！」

獄寺ははっと顔を上げた。

「山本、来るぞ！」

「おう！」

獄寺の言葉に山本はざっと前に出た。

それと同時に、炎の塊がこちらに向かって幾つも飛んできた。一つ一つがやたらに大きく、当たったら火傷ではすまないだろう。

だが山本は慌てたりしない。

時雨蒼燕流、攻式・八の型――

篠突く雨。

同じく死ぬ気の炎をまとった山本の刀が、一つ残らず炎の塊を斬り落とした。無論、獄寺や次元、五エ門に怪我は無い。

だが敵は打ち合わせていたように、煙の中から飛び出して散開した。

四人を取り囲むように陣を組み、匣兵器を構える。間を置かず、攻撃をしかけてきた。

死ぬ気の炎の塊が同時に四方八方から放たれる。打ち合わせたかのような攻撃だった。

「獄寺！」

「解ってる！」

山本の声に獄寺は怒鳴り返し、ロケットボムを炎の塊に向けて放った。

その後すぐ、自身のVGである嵐のバックルを使用する。

「瓜、行け！」

「によおん！」

VGから飛び出した嵐猫の瓜は、嵐の炎をまき散らしながら男達に飛びかかった。

炎はダイナマイトによって相殺されている。爆炎がこちらに及ばないよう計算されていたため、被害はこちらには及ばない。

むしろ計算外だったのは敵の方だろう。再び悪くなった視界の中で匣アニマルに襲われてはひとたまりもないはずだ。

「山本、おまえのもの」

「解った」

山本は頷き、雨のネックレスから雨燕を出した。

「小次郎、頼む！」

山本の言葉に雨燕は一鳴きすると、煙の中へ飛んでいった。

「な、何をする気だ？ それ以前にありや何だ？」

次元が恐る恐るといったていで尋ねてきた。

「今の動物、もしかして」

「あんたらも聞いたことあんだろ。匣の話だよ」

獄寺が答えると、次元は眉をひそめた。

「確かに聞いたことあるが……まだあれは実験段階の武器のはずだぜ。確かに使われ出しちゃいるが、まだ命令を聞くほど高い知能を持つ動物を入れた匣は無いはずだ」

「まあ……現代の武器じゃねえからな」

獄寺は返答に困る。元をただせば、VGは未来で作られたボンゴレ匣から造られたものである。現代ではありえない技術力だろう。

——いや。

もっとありえないのは、あのジジイか。

ボンゴレお抱えのあの彫金師を思い出し、獄寺は眉間にしわを寄せる。しかし、山本の声ですぐ我に返ることになった。

「獄寺、上！」

「！何っ！？」

山本の指したそれに、獄寺は目を見開いた。

夜の空に、複数の何かが飛んでいるのが見える。色とりどりのそれが死ぬ気の炎だと気付いた瞬間、敵の作戦を理解した。

「こいつら、おとりだったのか！」

煙が晴れ、敵の姿がはっきりと見えるようになる。彼らは全員倒れ伏しているため、上空の敵ではない。

つまり、獄寺と山本が倒した奴らはただのおとりだったのだ。守護者の目をそらせるためのおとり。

くしくもルパン達が使った侵入方法と似ている。しかし彼らは盗むためにそんな作戦を立てたのではないだろう。

なぜなら彼らは、ボンゴレ十代目のいるはずの部屋に向かっているのだから――！

「じ、十代目！」

獄寺は思わず叫んだ。

今からではダイナマイトも間に合わない。こうなれば形態変化を

カンビオフォルマ

その時だった。

ズドドドドドドドドドドドドド

突然、上空にいた敵が撃ち落とされた。一体何が起きたのか解らず、獄寺と山本、次元と五エ門は呆然とする。

「面白いことやってるね、君達」

と。背後から近付くものが一人。いや、もう一人近付くものはいたが、その人物のせいでかすんでしまっていた。

「ひ、雲雀……！」

「やあ、獄寺隼人、山本武。そっちは……例の二人かい？」

獄寺の驚きの声に、雲雀は軽く片手を上げた。

「おそらく、空から来る連中はまだいるだろうね――君達は手を出

すなよ」

圧倒的な殺気をにじませ、雲雀は不敵に笑った。  
腕に、雲のVGを付けて。

「上の群れは、僕が咬み殺す」

「あれは……！」

廊下を走る途中、爆発音に驚いたツナは窓の外を見、足を止めた。  
「どーしたの？ 急に止まっちゃって」

後ろでツナを追いかけていたルパンが、不思議そうな声を上げた。  
それに対し、ツナは振り返って苦笑する。

「どうやら俺達の出る幕、無いみたいです」

「はぁ？」

ツナにならって窓を覗き込んだルパンは、目を丸くした。

「とっつあん？ 何でいんの？ それに隣の奴は確か……」

「雲雀恭弥」

ツナは遠目からでも解るぐらい自信に満ちあふれた（ついでに殺  
気も感じられる）雲雀の立ち姿に、大きな安堵を覚えた。

やっぱりあの人は怖いけど、一番頼りになる。

「ボンゴレ最強の、雲の守護者です」

**戦闘開始、そして（後書き）**

まさかの雲雀と銭形の組み合わせ！ でした。遅くなってすみません。短くて申しわけありません。

次回は雲雀が大暴れます！ ……多分。

しばらく主人公二人は出番無し。主人公なのに……では！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7364p/>

---

Vongola famiglia&Il ladro che e' destiatolo

2011年8月18日00時24分発行